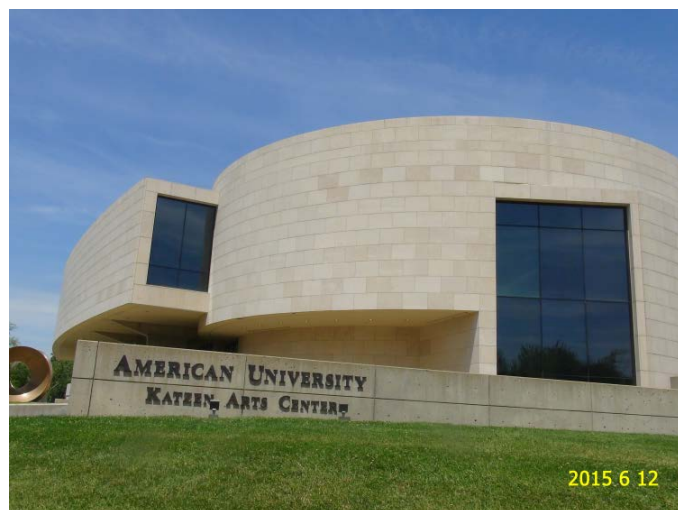


原爆の図アメリカ展に賛同して下さった皆様へ

## 皆様の募金により、ワシントンでの展示が始まりました。 今後ボストン、ニューヨークでも展示します。

6月13日からワシントンのアメリカン大学美術館で「原爆の図」展が始まりました。これは被爆70年に「原爆の図」をアメリカに、というよびかけに応じて下さった80の団体と約2000名の市民の方々の賛同募金によって実現しました。皆様のご協力に心から感謝します。

この展覧会は広島平和資料館・長崎原爆資料館と協同で行われ、広島・長崎の被爆資料や遺品もあわせて展示されています。広い明るい空間に「幽霊」「火」「署名」「とうろう流し」「米兵捕虜の死」「からす」がゆったり並んでいます。白い壁の部屋自体が明るく、スポットライトが上手にあてられ、丸木美術館で普段見る原爆の図とは違った鮮やかな色合いを見せています。



子どもに説明する母親、じっくり見つめる方、中には第二次世界大戦のときテニアンで通信兵をしていたという94歳の退役軍人の方もいらっしゃいました。彼は原爆投下を肯定する立場のようでしたが、絵の前で「私たちがこの絵のようになっていたかもしれないんだ。日本は中国で何をしたんだ」と語っていました。その方をこの会場に誘ってこられた85歳の元沿岸警備兵の方は「この絵は素晴らしいと思う。人間の想像力には限界があるから、絵が大きな役割を果たすだろう」と語っていました。



となりの部屋が広島・長崎資料館の原爆展です。壁面に原爆についての説明パネルが並び、フロアにいくつかの遺品が置かれています。千羽鶴を折るコーナーもあり、家族連れで追っていました。その後ろの壁に掲げられているのは、戦後すぐに広島の子どもたちが描いてワシントンの教会に贈られた絵です。

原爆が人間に何をもちたのか、アメリカでは十分知られていません。ここを訪れる市民の多くは初めて事実を知り、そして「原爆の凶」と向き合うのです。

## オープニングセレモニー

13日4時半から開幕式がホールで行われました。カズニック教授が司会をされ、広島平和資料館志賀館長、日本の大鷹公使の挨拶の後、広島2中2年生の時に被爆した山本定男さんが証言。一つ下の1年生が建物疎開に駆り出され爆心地そばで作業中に全員死亡したことを語られました。次に長崎で被爆した深堀好敏さんが、原爆投下後の写真を映しながら当時の状況を証言されました。深堀さんは15日までの一週間、ワシントンの国立公文書館で被爆後の写真の調査をされています。



最後に丸木美術館からの発言です。まず企画者の早川与志子さんが、この展覧会を実現しようとしてきた思い、そして芸術の持つ力への信頼について語られました。丸木夫妻の制作中の写真などを映しながらとても良いスピーチでした。その後小寺から、この展覧会が2000名の市民の、三度原爆が使われないようにという願いのこもった募金により実現したこと、丸木夫妻は加害と被害を複合的にとらえる視点で描いたことなどを話しました。ラスムッセン館長の締めくくりの挨拶をうけ、6時半に終了しました。

その後3階の「原爆の凶」の前で、広島の子どもたちの絵を保管していたオール・ソウル・チャーチの合唱団が平和のメッセージを歌ってくださいました。フロアは150名の人々でびっしり。原爆の凶をバックに歌われた平和の歌は私たちの心に染み入るものでした。

合唱が終わってからも夜9時まで、絵をじっくり見る方々が絶えませんでした。



## パネルディスカッション「記憶と反省のために」

16日（火）夕方から、パネルディスカッション「記憶と反省のために」が行われました。広島・長崎原爆展と結びつけて、仕事の中で戦争による苦難に取り組んできた芸術家クリスティン・ユキ・青野さん、キティ・クレイドマンさん、ミリアム・モーゼル・ネイサンさん、アイダ・セホヴィッツさんの4名による短いスピーチと話あいです。中心テーマはトラウマ・記憶・芸術でした。

青野さんは日系3世。箱の中に戦争中の日系人収容所の個人的な品を入れた作品で全米日系人博物館に設置されています。クレイドマンさんはチェコスロバキアで生まれ、イスラエル、スペイン、フランスを経て現在ワシ



ントン在住。自然景観が提供するインスピレーションに基づいた作品を発表しています。ネイサンさんはドミニカ生まれ、戦争とトラウマをテーマにしています。セホヴィッツさんはボスニア出身。2003年にスレブレニツァ虐殺の記念日にボスニアに戻り、土の床にボスニア・ヘルツェゴビナの地図を描き、亡くなった住民のために989のカップを置き、コーヒーを充填。土壌中に埋め込まれた3つのテープレコーダーが死者の名前と生年月日を唱えるというアー

トを通して虐殺を日常性の中で考える試みを行っています。

この4名の芸術家が「原爆の図」の前でその印象も交えて語り合いました。私も丸木夫妻が原爆の図を描こうと決意した状況、様々な被爆者の記憶を重ね合わせて32年間描き続けたことなどについて話しました。記憶を芸術がどのように表現しうるか、議論が核心に行こうとしたところで閉館時刻になってしまい少し残念でした。でもこの話し合いを聞いていたブラジル出身のアーティストは「原爆の図」にとっても感動したと熱く語られました。

## APの報道から

この展覧会をAPの記者が取材し、長文の記事がabcニュースやワシントンポスト、ニューヨークタイムズ電子版、さらにメキシコの新聞などにも掲載されました。またそれを見て、ロシアと中国の新聞社も取材にきました。その後半には次のように書かれています。（小寺訳）

《東京の郊外のギャラリーからパネルを持ってきた早川与志子は、米国でそれらを展示できる会場を見つけることが困難であったと言います。最後に展示されたのは1995年のミネソタでした。“この絵は長く続く平和と核兵器の廃絶を願う人々の心にまっすぐ届く（ストレートに伝わる）”と彼女は言いました。

Kuznickは、展覧会の主な目的は、原爆が地球を完全に破壊しうる時代、誰の未来も保証されていない時代に、原爆によってもたらされた人間の犠牲を描くことであると語った。彼がアメリカ人が、（彼が教えている大学生も含め）、冷戦終結以来核戦争がもたらす壊滅的な影響についてほとんど気にかけていないことを嘆きました。

「我々がこの取り組みを行う一つの理由は、危険が現実になっていないので、人々が再びそのことに焦点を当てることが重要だからである」と彼は言いました。

この展示は、日本の被害を示すだけではない。二点の「原爆の図」は、原爆の中でのアメリカの捕虜の死と強

制労働をさせられていた朝鮮人の死を描いている。最も忘れられない作品は「からす」で、死んでからも差別に直面したことを表すように、朝鮮人の死体をついばむからすを墨で描いている。その絵には画家による言葉がそえられていて、「朝鮮人の死体は最後まで路上に残っていた」と書かれている。「私たちは犠牲者としての日本人だけではなく、加害者としての日本人の姿も展示している。それは原子爆弾を使用した米国の責任を軽減するものではないが、物語の複雑さを少し示すものである」と Kuznick は語った。パターン&コレヒドール記念協会の会長で、日本との戦争におけるアメリカ人の元捕虜を支援しているヤン・トンプソンは、原子爆弾は、誰もそれを祝うことができない悲劇だったと考えている。彼女はまだ展示会を見ていないが、それは原爆の使用が正当化できないという見方を促進するだろうと関心を示している。

Kuznick は、この展覧会に対する反対の動きは全くないと述べた。》

この記事の最初だけ転載します。 <http://wric.com/ap/japanese-art-on-atomic-bombings-on-exhibit-in-washington/>

## New exhibit offers different perspective on World War II end

MATTHEW PENNINGTON, The Associated Press Published: June 13, 2015, 3:30 am Updated: June 13, 2015, 9:10 am



In this photo taken June 10, 2015, a 1955 paper and Indian ink artwork called “Petition” is displayed at the Hiroshima-Nagasaki Atomic Bomb Exhibition at the American University Museum at the Katzen Arts Center in northwest Washington, to commemorate the 70th anniversary of the 1945 atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki, Japan. The exhibition is opening on June 13th. (AP Photo/Manuel Balce Ceneta)

WASHINGTON (AP) — As the 70th anniversary of the end of World War II approaches, a new museum exhibition provides

a different perspective on the end of the conflict — one in which Japanese were the victims. 以下略

この記事が「原爆の図」の写真と共に全米に発信された意味は大きいと思います。戦争を終わらせるために原爆は必要だったとされているアメリカ社会でも、原爆が何をもたらしたのかを直視しようという市民は確実に増えています。95年に計画された原爆展は退役軍人らの猛反発で中止に追い込まれましたが、今回はそういう動きはありません。

今春国連で開催された核拡散防止条約NPT再検討会議は、最終日にアメリカが、核を隠し持つNPT不参加国イスラエル擁護のためにNPT会議自体を決裂させるという幕切れになりました。そこで国際赤十字やオーストリアなどの非核有志国は、次のステップとして核兵器禁止条約を秋の国連総会に提出しようとしています。そこで核の非人道性が議論され、核兵器禁止の声が高まるでしょう。そのさなかに「原爆の図」がアメリカにあるのです。ワシントンでの展示は8月16日まで、その後ボストン大学(9.8-10.18)、ニューヨークのパイオニアワークス(11.8-12月中旬)と続きます。多くのアメリカ市民がこの図に向き合い、きこ雲の下で人間に何が起きたのかを心の目で見ること、核超大国アメリカでも核兵器廃絶の声が広がっていくことを願っています。

募金してくださった方々への報告も兼ねたチラシを作りました。必要部数を送りますので美術館までご連絡ください。3都市での実施となり費用はまだ不足しており、引き続き募金は受け付けます。ご協力をお願いします。

公益財団法人原爆の図丸木美術館理事長 小寺隆幸

kodera@tachibana-u.ac.jp

355-0076 埼玉県東松山市下唐子 1401 Tel:0493-22-3266